

TAMA 映画フォーラム特別上映会

『100,000 年後 の安全』 をめぐって



特集Ⅰ 木村文洋氏インタビュー

たましな通信

Issue Vol. 01/2011

TAMA映画フォーラム
実行委員会

〒206-0025
多摩市永山1-5 ベルブ永山
(永山公民館内)

代表：042-337-6661
直通：080-5450-7204
<http://www.tamaeiga.org/>

青森県六ヶ所村の核燃料再処理工場で働く労働者の内部被曝の問題を描いた映画『へばの』。本作は、二〇〇八年の第九回TAMANE WAVE コンペティションで上映された。世の中の原因への関心が高まる今、木村文洋監督は何を感じているのか？『100,000年後の安全』の感想『へばの』の制作や上映などについてお話を伺った。

『100,000年後の安全』の感想

サ ご覧になっていかがでしたか？

木村 今年の二月くらいに、上原原発が一回衆議院で差し止めになろうとしたじゃないですか？ その前くらいに阿佐ヶ谷ロフトで、鎌仲ひとみさんと飯田哲也さんのイベントをやっていて、『ミツバチの羽音と地球の回転』の公開前で映像も一緒にやったりしてて。そこで質問をしたことがあって。フィンランドで初めて最終処分地が決まったじゃないですか？ スウェーデンはまだ原発を結構使っている国なんですけど、「廃棄物の再処理が決まったのには国民の理解があるんですか？」っていう質問を飯田さんにしたら、それは日本みたいにこれだけ原発を使ってる、廃棄物がいざ出たんであなたたちが責任取りなさいよっていうんじゃないくて、北欧は国民と国の信頼関係がすごく強くて、そういう処分地が決まったんだみたいな回答があって。そのときびっくりしたのが映画でも出てくるんですけど、あの処分地に決まったところは地震がもう何年って言ってましたっけ？ 何億？

オ 古生物代のはほとんどテッパンですねか全然地震なんか起こりえない地層という

木村 そういう何万年というか…すみません、ちょっと単位は忘れてしまったんですけど、要するに全然地震が起こったことが

ない地域で、世界にそういうところがあるんだって正直びっくりしたんですよ。日本はマグニチュード五くらいの地震が毎年あるような世界四位くらいの地震大国で。フィンランドの処分地に、最新の施設ができるんでどんなものかなって興味津々で見たいんですけど、やっぱり気の遠くなるようになってというのが最初に見た実感ですね。

オ そういう施設の映画としての描き方についてはどうでしたか？

木村 映画としてはどうなんですかね？危険がどうか管理がどうかという科学的な話になるかと思えば、割と文学的な話になって(笑)。

オ 文学的というか哲学的な。だって結論が「忘れることを忘れるなだから」(笑)。

木村 まあでもそういう理解なんだろうというよりは、十万年後の人類にどう伝えるかという話ばかりしてて、きつとそうなんだろうなと思って。だからあの監督も、遺跡に彫られた象形文字と同じ感覚で映画を作ってるんだらうなって。イベントの時に福島瑞穂さんが話して核のゴミ捨て場みたいになったりして、それはそれで問題だみたいな。あの映画を見て単純にいいなと思いましたがね。最終的な答えというのが一番早く見つかって。日本はまだ

木村文洋 (『へばの』監督・脚本)

1979年青森県生まれ。大学在学中より映画制作を開始、同時に京都国際学生映画祭運営に携わり、国内外の映画の上映を行う。2003年、『ラザロ-LAZARUS-』(井土紀州監督)の第一部「蒼ざめたる馬」篇の企画を立ち上げ、スタッフとして参加。2007年上京後、『ラザロ-LAZARUS-』上映スタッフとして活動する傍ら、本作品の製作にかかる。尚、本作品が長篇初監督となる。プロダクション：<http://ameblo.jp/bunyokimura2009/>

棄物の最終処分地も決まってきたんじゃないですか？ まだ原発を増やすという話もしてるし。その現実の違いというのはいいなって思っちゃって。何がいいのかわかりませんけど。

オ 北欧は徹底した情報開示がなされてるんですね。北欧によっても違いがあると思うんだけど、日本は（原発事故）一ヶ月目にメルトダウンしてましたという情報をようやく出してくるような国で、それを許容してしまってきたんだな、私あるいは私たちはこういうふうにつくづく思い知らされて。

木村 処分地を作るにしても、アメリカとかは再処理をしないとかそういう上で候補地を探してたりして、日本の場合、再処理もやるし高速増殖炉もあるし、原発もまだやるしという。それで処分地決めさせてくれと言われてもちよつとわかんないよという話もありますね。

オ 飯田哲也さんの結論を言うのと、まずは原発を止めると。止めてゴミ増やすなど。そこから話を始めようというスタンスなんですよね。道理に適ってるなと思えますけど。もんじゅもお金注ぎ込むだけ注ぎ込んで危なっかしらありやしない。

木村（東電の）株主総会のニュースとか泣けてきますよね。（原発撤退提案に対して反対の人が）5%から8%って。

『へばの』を撮るきっかけ
木村さんはずっと青森にいたんですか？
木村 十八歳まで、弘前というところに。
マ どういう動機で『へばの』を作ったんですか？

木村 実は僕は六ヶ所村に行つたのは二六歳のときが初めてで、二〇〇六年なんです。地元にはいたときは知事が持つて来たつて親がぼやいてたことくらいは知ってたんですけど。全然意識も何もなくて。自分の県にまあいう施設ができてるって、全く知らなかったんです。大学に入った頃くらいに、政治研究会の人に捕まったりして、原発の資料を読んだりしたことがあって、最初に読んでたのが、浜岡原発で除染作業をしていて、浜岡で亡くなったという二九歳の労働者の話で。その方の最後の亡くなり方が、自分の部屋で真夏なのに震えながら亡くなったとか。ベツドには白血病だからかわからないんですけど黒い汗が染み込んでいて、影になって残っていたという。それを大学一年のときに読んでみんですけど、結構すくすく残ってて、それって結構昔の話なのかなって思ってた。その方が亡くなったのは一九九一年とかで割と最近だったんで、それが忘れられなかつたんです。けど、かと言って大学の頃は何をするでもなく。普通に映画を撮っていたんで、いざ学校を出て映画を撮らうとした時に、何を撮りたいかわからない時期が三年くらいあって、それでとやあえず自分たちが今どういう時代に生きてるかを映画してみたいと思つたときに、それを思い出して調べたら六ヶ所村にその施設があったことを知ったという。昔から（関心が）あったとかそういうんじゃないって、映画と原発の話がずっと切り離されてたんですけど、あるときに急に交錯してみたんだ。わけのわからな

い映画を作ったんですけど（苦笑）。六ヶ所村にも行ってからまだ四、五年くらいしか経ってないんですよ。結構離れてるんで、弘前と六ヶ所村が。車で三時間くらいかかるころで。

サ 弘前にいたことですか、関心はまったくなくなってますか？
木村 そうです。親がぼやいてたくらいで、なかったですね。
オ 二〇〇六年と言ったら鎌仲さんの『六ヶ所村ラブソニー』が公開になるかそれくらいか時期ですよ。身の回りではどうでしたか？

木村 実はうちの高校から再処理工場の原燃で働いてる人は結構いて。それ（原発問題）って年齢とともにみんな知っていくという形なんですけど、十代の頃は正直話題にもなつてなかつたと思います。まだ建設されてる途中だったし。知ってる人は当然知ってるんですけど。

マ 離れた場所だとしてもそういうリアリティというものはやっぱり感じにくいものですか？ 僕なんかはずっと東京にいたので、まったくそういう問題意識みたいなのはなくて。恥ずかしなから三、一以前に『へばの』を見て正直よくわからないなという感じだったんですけど、改めて見るとリアリティみたいなものが全然変わっちゃって、まったく違う作品じゃないかと感じました。

木村 おっしゃる通りで、多分青森の人も、一度終わってしまつた話だつたと思うんですよ。一度反対運動が盛り上がった時期もありますし、何十年と続けてるおじいちゃん、おばあちゃんという年代もいると思うんですけど、一旦あそこに誘致して建

設が始まったら、仕方がないんだからこのまま行くしかないというところで、そんなに議論にもならず。弘前という離れたところでも知ってる人は知つていても、うちの親とかも全然知らないですからね。うちの父親だに逆で「そんな施設が」で喜んで「かよく知りもしないくせに言つてたりするんで（苦笑）。一度完了した話だと思っんです。

オ 鎌仲さんの『六ヶ所村』でひどいバトルをやつてるシーンありますよね？ 漁師さんたちが「建てなな！」って言ってる。一番やつてる人が今どうなの？ ってインタビューに出て来た覚えがあるんだけど。その年代あるいは七十年代末に原燃が来るんだって言つてたときに反対してた人でも、結局はできちゃつたならしょうがないというふうな受け入れざるを得ない状況になつたのか、あるいは自分たちでチョイスして来たのか。

木村（六ヶ所村の核燃料再処理工場の）試運転が始まってから被曝した人と被曝した疑いのある人が三、四人くらい出たんですけど、その方たちの存在というの、東京の新聞だと四コマ漫画の下にちよろつと載るくらいで。『へばの』にあるような物語っておそらくひっそりと組上に上げられるような話で、ちよつと耳を澄ませないと聞かえないくらいの話だと思っんです。

原発を描く
オ 木村さんだったらあの『100,000年後の安全』のオルキルトという素材をどのように撮りますか？

木村 地元民の話が撮ります。どういふふうな生活の中で考えて理解して生きてるのかというのを。

オ 開発した人の話しか出てきませんか？ それはフィクションで撮られますか、それともドキュメンタリーで撮られますか？
木村 ドキュメンタリーじゃないですかね？ 淡々とシナリオ書かずに撮るみたいな。まあ撮れないですけどね。

サ 『へばの』は劇映画ですけど、それはそれまで劇映画を撮つていたからですか？
木村 主人公の女の子に対してスタッフでシナリオを考えたときに、自分たちの人生を投影で

いたからですか？
木村 主人公の女の子に対してスタッフでシナリオを考えたときに、自分たちの人生を投影で

いたからですか？
木村 主人公の女の子に対してスタッフでシナリオを考えたときに、自分たちの人生を投影で

『へばの』(2008年/日本/DVCM/81分/制作・配給:team JUDAS)

脚本・監督:木村文洋 出演:西山真来、吉岡睦雄、長谷川等、工藤佳子
青森県六ヶ所村。そこに住む紀美は、再処理工場で働く治との結婚を間近に控えていた。創設から工場に携わっている父・大樹(だいき)と親子二人で暮らしてきた紀美は、治と新しい家庭を築いていくことにささやかな幸せを感じていたのだ。ある日、治は作業中にプルトニウムの内部被曝に襲われる。大樹は二人の間に生まれるであろう子供に、被曝による影響が出ることを案じて、二人が結婚することを反対する。紀美はそれでも治と一緒にいることを願うが、紀美の想いを打ち砕くようにして、治は突然姿を消してしまう。

三年の月日が経ち、紀美は静かに生活していた。その周囲で、突然治が戻ってきたという噂が囁かれる。それを聞いた紀美は、あてもなく治のことを探し出してしまふのだが……。

きたり。僕らは六ヶ所村に住んでないし、離れたところに立ってるんですけど、主人公の行動とかを考えることで、あそこに立てるのかって思ってた。ドキュメンタリーだとそこに立つてる方を撮ることにするんで、もちろんそれでもシナリオを書いたってできると思うんですけど。自分たちならどうやってあそこに立つたかっていうのを考えたときに映画として、三年間待って最後に子供を産むっていう、特に話もないような話ですけど、そういうことができるっていうことなんじゃないかって。

サ 『へばの』を当時撮ったとき、原発事故が起きてしまった後では描き方は変わりますか？

木村 やっぱり事故が起きてから一ヶ月くらいは精神的にきつかったですよね。いまでもどどん被曝する労働者の方が福島にいますよね。あの殺された彼（治）についてどれだけ考えていたんだろうって。これからは何年かかかるかわからない冷却作業の中で、（基準が年間）二五〇mSvじゃないですか。あれって本当に今まで日本の防災史になかった。さっき話した白血病で亡くなった人って、九年間で五〇mSvとかで亡くなってるの。

オ 『隠された被曝労働』っていう作品があるんですけど、この間そこで見た気がする。二九歳で亡くなって、その遺影を持ってたお父さんとお母さんが写真とか旅行とか本が好きでって、息子さんの部屋ですつと話すんですよ。

木村 ちよつと話を戻すと、撮った当初言われたのは、プルトニウムを吸い込んだくらいで女のところが逃げないでしよって

いうような。それでも子供を産んでいる人だっているし、意志が強かったら一緒にいるじゃないって。世の中の公害とか労働つてキツイもののはってあつたら、何で逃げるの？っていう話も結構されて。それは自分の中であの映画を作ったときから、割と課題だったんです。実際福島でああいうことになったときに放射線について敏感になったり放線線について、それは僕自身は一人なんじゃないんですけど、実際に小さい子供がいる友達とかストレスが全然違うなつて思ってた。米を炊く水も変えたりこの状態がいつまで続くんだろとか、それなら周りに後ろ指を指されようが関西に移住したほうがいいだとか、そんなことをずつと考えてたら、『へばの』の（彼）はあの家族と一緒に考えていくことが嫌になって逃げてもうちよつと誰かと出会わせるべきだったかと思つて。今だったらいろんな描き方に対して変わるんだらうなつて思います。映画から復讐を受けてような感じで。あの映画を作ったときに考えたことの基本は変わってはいないんですけど、やっぱり違うものが見えて来たつていうのはありましたね。

次回作について

オ 次の映画は計画されてるんですか？

木村 そうですね。準備をしてます。六ヶ所村から父親と娘をおいて置いて出てきた母親とお兄ちゃんの話を次やろうかなと。

オ でも何か私は、逃げるつていうのも自分に真面目に思っているか誠実な生き方だよなつて思いましたね。結局最初に殺されちゃ

う彼も、何を持って誠実つていうかわからないけど、それも誠実な生き方じゃないかと思つたりして。逃げたくなつちやうだらうし、逃げたつていう自分、真面目というか正直というか。『へばの』の最後のテロ行為みたいなシーケンスがあるじゃないですか。あれはどういう？

木村 誰かが持つてたということなんですけど、プルトニウムつて絶対漏れない漏れないつて言つても海からも漏れるし、いざれ東京にも出ていくつていう。それがプリキ缶に入つてそこにあるのかわからないんですけど。実際どうあつても勘定合わないらしいです、海外のデータだと。

マ 撃たれたのも、今でこそ深読みを逆にしちゃつて、結構暴力団とも関係を取り沙汰されてるんじゃないですか。そういうのを込めたのかなと。

木村 鳥が撃ち落とされるシーンの一応あるんですけど、イギリスの再処理工場で排気筒に鳥が群がってるらしいんです。そこが温かいんで。そうすると鳥の羽が汚染されるらしいんですよ。その羽が村の畑とかに落ちると汚染がどんどん広がつていくんで、再処理工場では敷地から出ないように撃ち落とす職業つていうのがあるらしいで、イギリスの敷地内では鳥の死骸が堆く、低レベル放射性廃棄物が扱いらしいんですけど。そういう意味合いで彼も出るなつていう、そういうシーンも撮つてたんですけど切っちゃったんで。

『へばの』の上映について

サ 『へばの』を（ポレボレ東中野で）公開した後、上映活動は続けていたんですか？

木村 結構やりましたね。今年三年目ですけど、東京でも去年はアップリンクでやつたりとか。ノー・ニュークス関連で一回やつたりとか、割とまあいろんな所で神出鬼没的にやつてますよ。

サ なるほど。震災以後に上映会は増えたりしましたか？

木村 増えました。最初に東京で自分たちでやってみようつてことで、一日だけやつたんですけど、大阪、その後山梨に行つて来週は富山にも行きます。震災以降で四ヶ所ぐらいい、七月後半には名古屋でもまたやります。そんなに大規模な上映じゃないんですけど。

サ 上映会でお客さんの反応とかは、震災以前と以後では違いますか？

木村 泣く人がちらちら多く見るようになりました。福島にご家族がいらつた女性の方とか見に来てくださつて。座談会を五月の上映の後にやつたんですけど、ものすごい複雑な今の心境を吐露してくれたりとか。

オ この間アースデー関係で福島のお母さんと子どもを二十人ぐらいいつと呼んで、一日だけの息抜きに支援金からお金を出してご招待したんですけど、避難するつて言うとか家族からやっぱりちよつと：つて言われるけど、一日だけ息抜きに行つてくるつて言つた息抜きがやつたつて。

福島市なんかでも外で遊べる時間が今、制限されているじゃないですか。でも東京に来たら裸足で歩けるとか、外を歩けるつていうのが嬉しいらしいんですけど。閉ざされた所にいるストレス障害の方がまず来てるつていう。放射能、放射線だけじゃない、作品の中ではお母さんと息子がつていうのもあるし。

木村 放射線うんぬん以上に、おつしやるとおり、隣人との価値観の違いがあつて。それつて三月一日以前も上関の状況とか見てると、そつちのほうがかきり言つてキツイですよ。

マ そういふ人の分断を起しちゃうつていうのが、すごく残酷な存在ですよ。元々あつたような分断が、顕在化してきちゃつたつていうか。対立を煽られちゃうようなところがあるつていうか。

オ 伊方原発で訴訟をやつてた人は今どうなつてんだらうなつて。あれもかなり反対運動があつたつていうのを「25年目のチェルノブイリ」の特集なんかで初めて知つたんですよ。

木村 「ゴミをもう出さないようにしましょう」つて、それが最近ネットでは、子供でも言える理屈だつて書かれるんですけど、その子供でも分かるような話をなぜ考えないの？つて。

オ 子供のほうが正論言つてるよつて。

木村 いろんなことを盾にできませんけどね。たしかに、原発使わなかつたら燃料費かかつて日本の経済がまたダメージ受けるとか、電気が不足して死ぬ人もでるとか。

マ ああいう対立をみると、暗澹な気持ちになりますよね。

オ どうそこを切り崩していけるかだなあと思うんですけど、どこかにはヒントはあるはずなんだけど。

サ 本日はお忙しいところ、ありがとうございました。

（二〇一一年八月三十日新宿にて聞き手 実行委員三名色）

特集Ⅱ 実行委員座談会

TAMA映画フォーラムでは今回の上映に先駆け、この映画の試写会を行いました。その後、委員有志が座談会形式で語り合った様子を公開します。

出席者 男性五名 女性二名(司会・本紙編集長)

サ 映画を観ていかがでしたか？

ヨ 雰囲気が『2001年宇宙の旅』みたいな映画だと思った。穴掘るところとかが『2001年宇宙の旅』っぽくて、トークしてるところを除けばね。

サ 作品のテーマについては？

ヨ テーマというか原発問題でいいのかな？ 過剰に反応してる人と楽観視してる人のギャップが大きいかと思った。いままで経験してないことをやるわけだから、すごいそれを重視する気持ちもわかるけれども、過剰に反応してる人たちってのは原発問題それ自体を問題にしてるんじゃないかと、ただ騒ぎたくて騒いでる人たちもいるのかなと。いわゆるプロ市民と呼ばれるような原発問題に託けて、自分たちの情報を誇示してるんじゃないかと。大抵そういうの騒いでる人たちって、例えば原発の問題で、半減期とは何かとかさ、単位がちゃんとわかっているのかとかさ、そういうのは感じるんだけど。何か過剰に言葉だけ捉えて、何とかの何倍ですという数値だけ捉えて問題にしてるのはおかしいかなと。

ワ まず反核の映画かなと思ってたんですよ。これは勝手な思い込みなんですけど。だと思ったら、そこから一歩前へ進んで、核は使わなきゃいけないからそれをどう処理するかっていう、日本では踏み込んでいない次元に踏み込んでいて、何か逆に衝撃を受けたみたい。しかもまた氷河期が訪れて、全く違う人類が出て来て、言葉も通じない奴らにどうやって核の恐ろしさを伝えるかっていう、日本というか

世界の二、三歩先を行っている議論をしていること自体、同じ地球に住んでいる人たちがそういうことをやっていることがすごいなって思ったし、その切り口に驚いたのが素直な感想というか。

ク (都合で試写は) 最初と最後しか観れてないのですがNHKの50分版も観たので感想を。ドキュメンタリーでも色合いとか全体的に北欧センスだなって感じたり、ものすごく非現実的なことを話し合ってるなどとも思ったりしました。あとドキュメンタリーとしては、インタビュだけで繋いで面白くするのは難しいなというのを感じてしまっただけ。

サ 僕の感想を言うと、かなり哲学的というか根本的なテーマを扱っているように思いました。原発と原子力を利用することは実際問題、現実的にはかなりの問題を孕んでいるんですけど、根本的に原子力エネルギーと人間は付き合えるのかどうかということを問いかけているのかなという印象を受けて。生物に無害となる十万年後まで保管するってすごいSF的なことで、想像を超えた話が現実的に進行しているということが驚きですね。僕はそんなことは、まあやんない方がいいんじゃないかっていうか、そこにそんなに頑張るんじゃないかっていうか、そこをやるんだしたら、他のやり方で、原子力使わないう方がいいんじゃないかという個人的意見はあるんですけど……という感じです。

オ この上映会の企画者である私が実は企画書を出すときにすでに話をしたんですが、最終処分地の

話は私が徳島に居たときに体験してるんですよ。二〇〇六年の年末だったかな？ 高知県の東洋町というところで、そこが最終処分地に立候補しかけたということがあって、そのときに東洋町の人たちはのほほんとしてたんだけど、周りが「とんでもない！」ってことでみんな寄ってたかって辞めさせたいって経緯があったんですね。最終処分地に名乗りを上げるだけで、年間十億円、二十億円という交付金がただで降ってくる。文献調査だけで。過疎で悩みまくっている東洋町なんてところにはとてもおいしい話で、ただ東南海大地震が五十年のうちに必ず来ると言われる場所に、しかも海の中に処分地を作るということは非現実的な話であって、四国四県の知事が揃って遺憾の意を表したということがあったんですよ。その前に実は高知県の西の方の津野町というところでも最終処分地の候補地に立候補しかけたということがあったんですけど。私にとっでは、今回の映画は、「あの最終処分地の話ね」という、最初から知ってた話でした。ただだったら愛媛県知事は伊方原発って四国唯一のプルサーマルまでやってるところの原発を止めるかっていうところまでせず、過疎対策もするかと言ったらそれもせず、でも十億円、二十億円が降ってくるっていうことはありがたい話なんです。で、この映画を観たときに、無茶をやっているけど徹底してこれを論じているフィンランド人ってすごいって思ったんですよ。で、後から読んだ話では、すべて情報公開をして、しか

もたった四基の原発の最終処分地をやっているんですよ。日本は五四基ですよ。ただあそこに出てる人たちは、日本で言えば原発推進派の人たちにも思えるわけで、推進派の人たちをもつてもあれほどに悩ましい発言をせざるを得ない。かたや日本はどうなんだろう。ここまで情報が公開されているのかっていう思いとか。そんなのが四月の五日頃に観たときに思ったんですよ。その頃はまだ日本の中で安全デマというのがはびこってたときですよ。まだメルトダウンを認めてないときです。けど、

私は綿井（健陽）さんの話を伝え聞いていて、メルトダウンしてるってというのは知ってたので。「ああ人間モルモットになってるのね」っていうのは思っていました。で、十周年後まで責任は取れないけど、

次の世代に「ごめんさい」って何万回言っても足りないくらいに事態を私たち大人は引き起こしてしまっている私は思っています。それを一回でも減らすにはどうしたらいいだろうって。だったらこの核のゴミ、これは推進派であろうと否定派であろうと誰も逃れられない。じゃあそれどうするの？ ゴビ砂漠に押し付けていいの？って。そこもちゃんと逃げずに論じないとだめなんじゃないのって。チェルノブイリから二十五年経って、向こうでどれだけ悲惨な事態になっているかということ、広河（隆一）さんの「通販生活」の連載でここ二十年くらいこちらと読んで来ているので、四十代の私が還暦になる頃にはとても大変なことが起きるのではないかと予測がつくだけけれど、それはそれで別としても、せめて核のゴミなんとかしようやっていう気持ちがあつて。それも込みで原発必要か議論しようっていうふう思ったので企画書を出したんですよ。要

るなら要るで、その数値的なものとか、その合理性だとか感情論はあるけれどもちよつとそれを置いておいてどっちの方が経済効率がいいかっていうことをなるべく冷静に話し合いませんか？って思うんです。実はドキュメンタリーって合うのかなって思っています。あの中では実際はもう結論が出てるんじゃないかと思ってるのだけ。

ミ 何でフィンランドの人たちはそういうふうにし合ってる日本人は話し合わないのですか？

オ 情報をきちんと公開するところ、日本の中ではあまりできていないんじゃないかと思えますね。すべてを公開するということが、漠然とした言い方だけれども、日本の風土に馴染んでいないか。

ミ 公開されていないことに、僕は不満を持っていないということですかね？ それとも公開されてるって思ってますかね？ 僕らは、中国を見て不自由な国だなんて思うじゃないですか。だから何なんですかね？ その差というのは、フィンランドの人たちは話し合うけど、日本の人たちは話し合わないというのは。

マ ものすごく根本的なことを言っちゃると、例えば民主主義ってというのは、主権在民で。本当は、我々が自覚的になって政治を動かしていくっていうのが大前提なわけだと思う。そのためにはやっぱり情報は全部公開しなきゃいけないんだよ。だってそうしないと判断できない、自分たちが。でも、結局民主主義って：俺、明治維新とか全然評価してないんだけど、本当は元々日本が培っていた政治的方法論とかもあるんだけど、そういうのも全部捨てちゃって、(民主主義を)形だけボンって作っちゃったから。

だから何というかその空白が生じる中で社会が動いてるっていう感じがするけど。

オ 一つ言うと、ディベートの空気や感覚ってないじゃないですか。Aという一つの議題についてイエスとノーがあつて、イエスの人とノーの人が徹底的に議論して、けど議論の後にはちゃんと仲がいいっていう素地が作られてない気がする。議論の仕方が出て来ない。

マ 例えば、向こうだと弁証法っていうのがあつて、テーゼ、アンチテーゼ、そしてジンテーゼに到っている、市民生活からボトムアップで培って来た知識みたいなのが、多分あんまりないから、日本人が議論しちゃうとテーゼに対してアンチテーゼだけぶつけちゃうって、そのもう一段上に行かないっていうのがすごく感じるね。

オ 生活したら、例えば誰かのここがいい、ここが嫌いっていうのは色々非々があるじゃないですか。だけど、こういう議論になると是非かしかない。例えば、この間地下原発を作るっていう話になったとき、(それは)亀井静香さんが言い出したんですよ、私、「バカじゃないの？静香ちゃん」って思ったんだけど。でも彼が言ってる死刑廃止の議員連盟の動きにはすごい賛同してる。だから一人の人の話に対して、是もあれば非もあるよっていう。それともう一つ、ノルウェーの事例なのだけれど、犯罪も加害者も被害者についても徹底的に議論するっていうのができてるんですよ。それは、ひよつとしたら北欧だけかもしれないけれども、その徹底的に議論するということに慣れているか慣れていないかの違いがとて大きいと思う。あと、日本人は忘れっぽい。もう七月九日の時点で原発問題を忘れちゃっ

てるんじゃないかなっていうのを私はすごく懸念してるんですけどね。

サ それぞれどのメディアに接しているかによって温度差が結構ありますよね。新聞、テレビしか見ない人とネットメディアを見てる人と。

ク それが地震で表面化したみたいだね。元々そうだったのが、「あ、こうだったんだ」と見えるようになったというか。

マ 原発問題でいろんなことが可視化してきたみたいなことが。

オ 例えば、最終処分地の話はみなさん知ってました？ 四国で大騒ぎになっていたという話。あのとき鎌仲さんが来て、四国をキャラバンされたんですよ。『六ヶ所村ラプソディー』を上映して歩いて。鎌仲さんが「日本人って賢いからさ。技術あるからさ。きつと原発に頼らなくてもやっていけると思うんだよ」って直接みんなが話したときに言っていて。それが『ミツバチの羽音と地球の回転』に繋がったんだなって、去年観て思ったんで。その他のエネルギーがあるんだよって知ってる人たちにとっては、こんな最終処分地のドキュメンタリーっていうのは、いままさらな感があるだろうし。

ク でも全然知らない人たちにとっては。

オ すごい衝撃的だと思いますよ。

ワ 僕は実家が福島なんですけど、福島に行ったときに、原発の問題が表面化する前に、第一原発、第二原発の汚染水が流れているっていう情報を隠してますっていうニュースは、毎日のようにやってたんですよ。だから「またか」「またか」っていう人が珍しくないで。何でみんな興味を示さないんだろうっていう感じだったんですよ。

オ 日常茶飯事だったんだ！

ワ 当たり前みたいだね。本当にそんな感じで。だから関心がないのかなって。NUMOの広告とかも全国紙に載ってましたよね、僕は逆にそれに関心が湧いたんですけど。じゃあ周りの人が関心持ってるかと言えば関心なかったし、原発あるの？みたいな。福島県内でも、僕は中通りというところに実家があったんで、本当に浜の方の浪江とかあるところじゃないと、いやあるところでも関心があったのかな？って。本当に関心がないというか、他人事みたいなどころもあつたんじゃないかというのを非常に感じますね。

オ それは沖縄でこれだけのデモがありましたよっていうのを東京でのニュース発信で何もないみたいなのと同じかなってふと感じたんですけど。地元では当たり前前みたいなのが（全国区のニュースでは）拾われないう。

ク 地元（福島）でも少数は反対してる人たちがいるんですよ？

オ それはプロ市民という人たちがじゃないですか？

ワ 逆に、反対するとプロ市民みたいな人にカテゴライズされちゃうんですよ。

ミ そういうことを言う人たちがってまだ少ないんじゃないですか？「プロ市民」とか言うような人たちが。反対する人たちじゃなくて、反対する人たちに「あーだ、こーだ」言う人たちがっていうのはまだそんなに多くないかと。

マ でも、それは、多分サイレントマジョリティ…。

ミ そこまで多くないと思いますよ。ネットが出ていまでも多く見える気がするけど、そんな多くないですよ。でもそれが多数派だとしたら、民主主義で言っ

たらそれに従うしかないんじゃないですかね？ 敢えて言うなら。

ク その多数派の人たちの本音のうちは、本当は違うんじゃないですかね？ 隣に合わせとかないと自分も叩かれるからっていう。本当のことを人に聞いてみたらそうじゃない場合もあるかなって。

オ 隣に合わせるのには田舎での生存戦略の大前提ですからな。

マ 敢えて言うなら、少数意見の尊重も民主主義だからね。そこは徹底的に議論してるかといえぼしているわけじゃない。結局日本で議論は意味がないなって実は俺も思ってるから。だから何というか、議論というより、対話っていうイメージで話し合ってもいいんじゃないかと思うんだよね。議論っていうと、どうしても相手を負けせよう、負けせようとしちゃうから。対話っていったら相手の意見を引き取って、それをどうしていくかっていう。そういう姿勢で話し合っていく方法を作っていくかしないと後々また大ダメージを受けてしまうんじゃないかって気がするんだよね。

ミ 難しいですよ。議論するような国になれるかと言えばなれないと思うんですよ。それは、例えば民主化する前の段階から、いろんな国がヨーロッパとか民主主義がそういう段階をたどって来たわけじゃないですか。じゃあ同じ感じで日本はそれに対して前近代かといえぼそうじゃないし、そういう国ならそういう国なりの解決法って…。それは本当に難しいことだと思っし。放射能で汚染した土地で暮らしてて、それなりの被害が出てて、死んで、でもそれはそれなりに幸せですって言う人がいたら、そ

それは違うだろうって言ってその人が不幸せになるとまで言えないですよ。

オ 幸せ感ってすごく難しいからどこまでそれに立ち入るかかって…。それにしたって、情報公開ありきの話なので。その上で「あなたどうします？」っていう話だから。国民投票してイタリアが脱原発を決めたということを受けて、日本だったらどうなるかって。脱原発するならするで、そのための数値であり経済効率でありということの共有化が全然進んでないなって思うので、これを機に勉強しましょうって。それでどう舵を切るかは、みんなで決めたらいいじゃんって私は思ってる。

ミ フィンランドってそういうことに対しての国民の意識って元々あるんですかね？ 例えばイメーajですけれど、イタリアの国民ってあまり考えているとは思わないんですよ。

オ いや、けどチェルノブイリショックはすごいんですよ。私自身一九八八年にグルジアに行って、いまだにガンになってないの不思議だと自分でも思うくらいだから。ジャムをたっぶり食べて来てますからね(笑)。だから、どこまでの情報開示を受けての脱原発なのかは確かに知りたいところではありますよね。感情論からなのか。

ミ 友達が外務省勤務で、今アメリカにいて、ちょうどビンラディンが死んだときにホワイトハウスにいて、そのときの盛り上がりっていうのをツイッターで報告して、「U・S・A、U・S・A」って言うてる奴らが結構いるって。あれはノリでとりあえず裸になる奴がいて、それで「ワー」っていう感じで盛り上がりつつあるって。

オ それって阪神タイガースの優勝と変わんないじゃん(笑)

ミ 本当そうなんですよ。それがそういう形で出て、あれはあれでいいと評価する人がいるわけじゃないですか。ある程度考えてたのは、ハイパーじゃなくてスーパーナショナリズムっていうやつですよ。明治維新と敗戦で、革命というかわわっているんだけど、それを自分たちで選んでいるわけじゃないっていうのを。

マ 結局市民がいらないんだよ。市民がいなくて庶民しかないって言って。歴史の分断があると思ふんだよ。

ミ 歴史っていう言葉の分断であって、本来の意味での歴史の分断じゃないかもしれないって。

オ 本来って何なの？

マ いやまあわかる、わかる。繋がってる部分っていうのはあるんだよ。あるけど…。

ミ 形容詞的な意味での歴史というか。

マ もちろん実質的に繋がってるし、繋がっている部分はあるんだけど、変に歪んじゃったというか。例えば、日本で右翼っていうと絶対明治以降の日本の姿を理想としているじゃん。右翼自身がそれを意識してるかどうかはわからないけど。大日本帝国を理想として、それ以前を理想化しない。江戸時代に戻れとか言わないわけじゃん。だからむしろ本当に愛国心があって考えるなら、そういう歴史の繋がりをみたいなのをちゃんと意識して発言すればいいの、みたいな。例えば皇国史観とかも、あれも明治以降にできた観念で、とにかくその時代をすごく美化している。

オ 本居宣長まで戻る右翼っていますからね。

マ それもわかる。でもそんなこと言ったら、それこそ古代まで行き着いて。そういう歴史観を持ってばいいんだけど。とにかく大日本帝国以降を美化しちゃって、そこにすごい歪みがあると思うんだよ。ナショナリズムというものの自体が。その歪みをいかにして直すか。直らない部分はあるんだけど。

オ 原発って言うのは簡単なんだけれども、なぜ脱原発に舵を切れないかって言ったら、とりわけ日本人がどういふふうにか舵を切ったのかということにも原因があるだろうって話にもなってくるわけで、今回の原発問題で、いわゆるプロ市民じゃない人たちがデモとは言わない、パレードに関わっているというのが少し光かなと思っていて。普通の俳優が脱原発のツイートをしていたりとか。新宿の十八mの高さのところ放射線量を測ってんじゃないよとか。だから本当にみんな生活に直結した形じゃないと困ってるじゃないですか。だからこれは息長く議論の元になっていけばいいなって。片や福島は早く助けないとって。

ク こういふふうに変わってほしいなっていうのはあるけど、でも結局飽きっぽいところだなああって終わってしまうかもしれないっていうのはありますよね。

ワ 今は盛り上がりつつあるけど、じゃあ一年後はどうなの？って言ったら、どうせ同じになるんでしょみたいな諦め的な考えもありますね。

オ もちろんガンが多発したりだとか、奇形児が生まれて来たらどうなのかな？って

サ 被害が現勢化してないですからね。

オ 「ただちに」害はないですからね。

玄牝上映会レポート

5月21日(土) ベルブホール

河瀬直美監督による「自然なお産」をめぐるドキュメンタリー『玄牝』を5月に上映することが決定したのは今年の2月中頃のこと。それから上映当日まで、思えば色々なことがありました。中でも一番大きなハードルはやはり震災。人々の意識が変化していく中、上映会を開催すべきか悩みましたがこの映画が人の生と死を真剣にみつめているからこそやりたいと思えました。

そして迎えた5月21日当日、河瀬監督はカンヌ映画祭に参加中のためスカイプを通じてのトークとなり、直前まで電話が繋がらずハラハラ。しかし、本番ではばっちり繋がって、寝起き(カンヌは早朝だった)にも関わらず、熱くなめらかなトークを繰り広げてくださいました。距離を越えて会場の空気を読み、常に問いかけの答え以上のお話をする監督、さすがです。最後には、「TAMAは映画好きが集まる映画祭という印象がある。今日の質問もとても的を得ていた。」という言葉に励まされました。

この日の2回目の上映は「あんしんシネマ」ということで、小さいお子様連れのお客様のためにござ&座布団でリラックス空間を作りました。これが大成功。くつろぎながら映画を観ている後ろ姿がかわいかったです。子供達は何を感じ取ったことでしょうか。これからも色々な上映スタイルにチャレンジしていきたいです。

カンヌでも好評だった新作の『朱花(はねつ)の月』は9月3日(土)よりユーロスペースにて公開。お楽しみに。
(実行委員K)

シネマレビュー

CINEMA REVIEW

『ふゆの獣』



第8回 TAMA NEW WAVE 『かざあな』にてグランプリを受賞した内田監督の新作『ふゆの獣』(第11回東京フィルメックス最優秀作品賞受賞)がついに劇場公開された。

2年前監督にインタビューした時、これから撮影に入る新作について次のように語っていた。「『かざあな』と同じ形式だけど、今度は短期間で撮る。そのために脚本は用意するが、それは旅行のガイドブックのようなもの。演者には自由に旅して欲しい」

内田監督といえば半分ドキュメンタリーのような手法で時間をかけてじっくり作品を作り上げる(『かざあな』は制作期間4年)というイメージがあったため、どんな作品になるのだろうとその時から楽しみにしていた。観て感じたのは、濃縮された時間・空間がそこにあるということ。小さな世界で繰り広げられる逃げ場のないやり取りは息苦しいほどこちらを圧迫してくる。それだけではしんどい映画になってしまうところだが、この作品にはプラスアルファがあった。

ストーリーは、ごくシンプル。恋愛感情が絡んだ二組の男女が嘘をついたりつかれたりしながら修羅場を迎え、ぶつかり合ったその先を描いている。監督の「今回は撮りたいものを一気に撮る」という意気込みに俳優達が全身でついていったことが伝わった。どこかジョン・カサヴェテス作品を思わせるところもあり。

『ふゆの獣』は7月2日(土)よりテアトル新宿にてライトショー公開中。連日21:10より上映。公開を記念してK's cinemaにて旧作『えてがみ』『かざあな』を上映。詳しくは『ふゆの獣』公式HPをご覧ください。
→ <http://www.loveaddiction.jp/>



▲くつろいで映画を鑑賞された観客の皆さん

TAMA CINEMA FORUM INFORMATION

- 9月3日(土)、今年最後の特別上映会を行います。上映作品など詳細はHPその他でお知らせしていきます。
- 第21回 TAMA CINEMA FORUM 映画祭は11/19(土)~11/27(日)に開催予定です。お楽しみに。
- 支援会員募集中です。特別上映会の入場料が半額、映画祭パンフレット進呈などお得な特典付きです。